

うたらば

短歌×写真のフリーペーパー「うたらば」
2023.12 vol.35

TAKE FREE

今回のテーマ
仕事



短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。

古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。

このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に

現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。

軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

仕事



仕事と思えば
つまらないから
楽しみ方を探してみる
自分らしさと向き合ってみる

大切なことは
何なのか
脱力したら
見えた気がした

去年より人事評価が低くても

有給増える秋
外回り

短歌：あの井



駅舎からばっばっばっば開く傘

みんな何かとたたかいたかにゆく

その肩に
何かを背負って
雨降る街が
しずかに燃える

いにしえの海の記憶をひそやかに

運び続けるすべての海馬

生まれる前の記憶を
話してみよう
思い出せないけど
ここにあるから

歩道橋わざわざのぼって帰りたい

定時退社の空の青さよ

空の青さに
憧れるほど
僕らは自由を
愛したくなる

短歌：鴨岡佑

街ゆけばどこも誰かの仕事場で

どこも誰かの仕事したあと

何もかもが
かけがえない
この星を守る
大事な仕事

短歌：茂呂直人

向いている仕事がない

雲の数かぞえるバイトとかありますか

自分にしかできない
大切な役割を
見つけるまでの
旅と思えば

張り詰めてばかりじゃ
切れてしまふし
ゆるんだ時間も
許せばいいよ

退社して自販機アイス食べながら

きつめのポニーテールをほどく

短歌：長尾桃子

命を命に変えながら
未来をつむぐ
この肉体は
コンテナだから

生きて
いるだけ
でじゅう
ぶんいい
仕事

おつゆの
昆布のし
ずかなう
まみ

短歌：紡ちさと

耳へつたう涙のわけは尋ねずに

黒いゆたかな髪を洗った

接するようで
接していない
見えない線を
指でなぞった

鳴くことが
仕事だったなら
誰のために私は
鳴くのでしょうね

ばらばらに鳴く蛙たち調和して

世界もそうでありますように

佳作集



仕事

秒針を動かしているのはいつも小さな歯車僕らのような／遥風奏汰

曇天にビニールプールを出すように休憩室で食うパック寿司／古川柊

昨日から忌引きで休む支社長のブログにアップされてる魚拓／関根裕治

足早にバンへと戻るアイドルは警察署長の職を解かれて／たろりずむ

これでいい？これでよかった？永遠の自問自答が親業なのか／木村太帆

副業のほうが稼ぎの良い義兄のメルカリ捌きのすべらかなこと／芍薬

「今日はまだ仕事が残っているから」と小3は消ゆ あつ森の奥／古澤茅世加

クレームはリズムゲームというひとのええといえの匠のさばき／十条坂

シヨッカーは思えばホワイトだったなあ失敗しても左遷されない／ともえ夕夏

残業し帰宅しビールの銀はじき「ワタシ」というより「ワシ」って感じ／山本優実

駅員に背中を押され「いきなよ」とエールを受けたことにしておく／堀優季奈

空っぽのバスだ、と人が思うときバスの一部でいる運転士／榎枯井戸

在宅が「家にいる」ではなく「家で仕事」になって数年が経つ／音平まど

石油王になりたいと言う石油王のかなしみひとつ知らない頃から／牧角うら

折り鶴はいつも誰かのためだった炬燵の祖母の優しい手仕事／杜野詩季

脳内でスーパーマリオの音楽を流してこなすハードな仕事／石井啄也

商談の握手ばかりが上手くなるビジネス英会話のレッスン4／葉村直

先輩はホワイトボードに颯爽と直帰と記し街へでてゆく／西鎮

足元に伏して主人の声を待つ盲導犬のしずかな矜持／もなか

退職の花束すごく大きくて正社員にも勝てる気がした／朧



小金森まき

カルテット

秘められし力を解放するやうな気配を纏ひはじめの桜
菜の花の迷路で見失ひさうな吾子のぼうしを追ひかけてみる
昨日とは違ふつぼみの開きたる夏の日めくりとして朝顔
手花火に照らし出される子の顔はこの夏だけの閃光となる
夜歩くこともなくなりわたしまだ月下美人を見たことがない
カラフルな落ち葉の山を踏み鳴らしカルテットとして公園をゆく
フラメンコを踊るみたいに寒くても情熱的に咲くシクラメン
こたつとふ焚火を囲みきみたちが出てゆくまでは火を絶やさない

牧角うら

秋へ

夏はまた唐突に逝きそうやって今朝のひかりはきいろを帯びる
さめるまで僕らばたばた支度して飲み干す白湯のかすかに甘い
うす暗い急階段を音漏れのベースを胸に馴染ませながら
初めてのライブハウスを出た耳がまだ濃紺の深海にいる
ぼんやりと全てがとおい雑踏に無声映画のようなおしゃべり
寝過ごして降りる見知らぬ夜の駅 自販機だけが鈍くあかるい
下手くそな鼻歌だった目醒めれば夢で必死に聴いていたのは
キッチンにきみはくしゃみをひとつとして梨はつめたい朝陽をまとう

風花 雫

アスタリスク

もう夏が終わったことに気づかないふりして咲いている百日紅
占いの今日の一位をこれだけで使いきりそうな秋晴れの空
この秋の初物としてコンビニであれこれ迷う栗のスイーツ
ふわふわと今日の大事を告げるとアスタリスクで飛びゆく綿毛
十月の風を写しておきたくて土手のコスモスにシャッターを切る
秋の日の魔法は解けて今朝はもう金木犀の香らない街
ひとりずつ家族を花にたとえれば母は百合に吾は木香薔薇に
魔法書を開く心地で秋の日の葉膳スープレシピをさがす

関根裕治

胸に咲く花の名前も知らぬまま教室で咲くきみを見ていた
目があった高嶺の花がほほえんだ今こそぼくの開花宣言
まだきみは焚火の向こう側にいるフォークダンスの曲鳴り止むな
義理チョコをもらうなんにももらわないどつちが〈好き〉の余地ありますか
「またね」ってきみがこぼしたその「たね」を育てていきます花咲くように
クローバーなら持っていたでもきみと会って葉っぱが一枚増えた
実が落ちて引力知ったようにいま涙が落ちて恋だと知った
〈恋〉の字の底のカーヴは橇に似て直滑降できみへと向かう
口を出た告白がいま紙コップ同士をむすぶ糸をゆらして

プロフィール

2021年2月に短歌に出会いました。2023年11月から塔短歌会に入会。生活のすきまで短歌を詠んでいます。「うたの日」や「うたらば」、新聞歌壇などに投稿しています。手芸も好きでよく編んだり縫ったりしています。

プロフィール

2020年夏、作歌開始。
漫画と朝寝坊とミッフィーが好き。
だいたいXことTwitterにいます。

プロフィール

子どもの頃から三日坊主の癖があり、いろいろ中途半端に投げ出してきました。習い事、部活、仕事 etc...そんな中で唯一続いているのが短歌です。これからも、気負わず楽しんで自分のペースで詠みながら、この最長記録を更新していけたらと思っています。

プロフィール

東京都出身。埼玉県在住。無所属。休日はたいてい映画館か書店か中古レコード店にいます。先日生まれて初めてらくだに乗りました。

葉村直

雪を待つような手の平すり抜けてキャッシュトレに置かれるお釣り
いい人が入れた千円その上に一元はかさりと落ちていく
きつつきも商売をするこの空にコピーライトっぽいものがある
マジックをまだ見ていたから選ぶ銀貨をにぎっていない方の手
コイントスつかみ損ねてあたふたと拾う時点で僕の負けだろ
降りたことなくてこれから先もないバス停の運賃を見ている
参道にならぶあいだに聞かせてよ今年もお賽銭の雑学
駅前のギターケースに投げ銭をきみは投げずにしゃがんで入れた

空のコピーライト

プロフィール

2021年から短歌をはじめました。
俳句や小説も好きで書いています。
ギザ十を見たことがありません。

三田村諒子

サンダルがペランダに二つ干されて誰かの夏が終わったみたい
レモンティー飲んでいた日のくちもとにいつもわずかに香るゆうぐれ
野良ネコの背中を撫でればすぐに骨のちははすべて曖昧じゃない
最後にはどんな景色を見たらだるう川べりにある盗難車たち
ふさわしい住宅街の環境音子犬のワルツの歩みゆっくり
地下鉄の風に吹かれて聞こえないけれどたのしい顔をしたひと
鳥としてたりない何かを探すためカラスが今日もあつめる光
千年後ほろんだ世界へとどきたい那由多の数の採集記録

採集

プロフィール

2021年よりインターネットを中心に短歌をやっています。短歌ユニット「三日月ごっこ」としても活動中。

早坂つぐみ

ラピスラズリ
未来へのきもちが成長期なもので玄関先からちょっとこぼれる
朝ごはん毎朝食食べるだけなのになんでこんなに難しいんだ
改札を通ったわたしべっしょんこ一限までに復元させる
これからのことを話そう 瑠璃色の部屋に居続けることはできない
さっきまで完璧だった前髪を消失させて挑むES
受け取った荷物の中で咲いていた枯れることないカトレアの花
甘くない醤油に慣れたわたし宛てエールは知ってる筆跡だった
それぞれの道を踏み出せ瑠璃色の部屋で出会ったみなさん、またね

プロフィール

神奈川県在住です。2022年12月から作歌を始めました。好きなことでご飯を食べていけるようになりたいです。

ふうらい牡丹

まわるいのち
赤エビは一貫だけで絵になってまわる前世はたぶんアイドル
唐突に海鮮サラダ軍艦が現れました 平和ではない
えんがわが全ての席にえんがわをもたらし皆熱い茶を飲む
死んでから立場が変わりレインではイワシがマグロを追いかけている
最期まで下手に生きたいどうしても崩れてしまうオニオンサーモン
永遠にまわるいのちを脇に見てかんびよう巻きが手元に届く
輪の中で誰のためでもないイカが握られて世に送り出される
本当のカヌレを知らず食べているカヌレはブリとおんなじ絵皿

プロフィール

落語家をしています。大阪で暮らしています。怪談も好きです。最近かっこいいチェス盤を買いましたが、まだチェスのルールを覚えていません。

ぬぎすてたズボンにつま
たどんぐりが今日のあの子
をおしえてくれる

(十条坂)

幼稚園からの帰宅後でしょうか。しばらく離れて過ごしている間の出来事がズボンの中にぎゅっと詰まっている感じがとても微笑ましいです。が、面白いのはそのズボンがどんぐりと脱ぎ捨てられているところ。宝物のように拾ってズボンに詰めたどんぐりのことを帰り道の間に忘れていた。それもまた小さな子であるですね(笑)



殉教の葬列のごと蟻たちは
揚羽の翅を掲げて進む

(伊古野わらび)

「殉教の葬列」は時に数万人の人が列をなして進むもの。揚羽を巣へと運ぶ蟻たちの様子もまた蟻たちの大群が列をなしていたのでしよう。「揚羽の翅」が列に並ぶ蟻たちを導くフラッグのようにも思えて、何でもない日常のワンシーンが荘厳な景色として目に浮かびました。

教会はひかりの中に佇んで
さみにこれでもかと花の雨

(中山史花)

下の句の表現がとても美しく惹かれました。「花の雨」とはおそらくフラワーシャワーでしょう。そのまま書く文字数も使いますが、5音かつ詩的に表現されているのが見事です。光に溢れる教会で開かれる結婚式、大勢の人が笑顔で新郎新婦に花びらを投じている様子が「これでもか」により最高のシーンとして描かれています。

住んでいる街も誰かの旅先
で信号機すら褒められてい
る

(文野やよい)

実は私も観光地を地元として育った人間として、観光客の方々があったの石垣の写真を持ちまくっているのを横目に暮らしていました。北国の信号機が縦長になっていることなど、そこに暮らしていない人からすると目新しいものはあって、そのギャップがまた旅の魅力でもあるんでしょうね。

教室に並ぶ「きぼう」とい
う文字の群れのどれもが
真っ黒でいる

(しもじ)

「きぼう」が平仮名なのでおそらく小学生の書き初めか習字の練習でしょうか。希望とはきらきらしたものはずなのに張り出された作品は全て墨汁で書かれた真っ黒の「きぼう」。その違和感を掬い取ったところに作者のセンスを感じました。

読む。

「月刊うたらば」より
文・田中ましろ



午後6時知らない会社のC
Mが流れる町の旅館に来て
る

(中山あゆみ)

いつもなら慌ただしく過ごしているはずの午後6時という時間に、旅先の旅館で見る知らない会社のローカルCM。旅ならではのゆったりとした感覚が時間帯と行動の掛け合わせにより強く印象付けられる作品でした。ほんやりと過ごす時間って大事ですよ。



あの雲も旅人だろうトウク
トウクに揺られ大地はいま
麦の秋

(広木登一)

下の句の表現の美しさに惹かれました。「麦の秋」は俳句では季語となる言葉。時期で言うト小麦が黄金色に輝く初夏のころですね。「トウクトウク」なのでタイの景色でしょうか。夏の青い空に浮かぶ雲と大地を埋め尽くす一面の麦畑。広大な視野に色彩の対比が美しい作品です。

作り方を教えてくれたばあ
ちゃんを今夜迎えにゆく精
霊馬

(西鏡)

精霊馬とは主にお盆で現世に帰ってくる祖先の霊が乗り物となるお供え物。その風習を教えてくれたばあちゃんも天国にいて、そのばあちゃんのために孫が精霊馬を作る。そうやって風習は世代を越えていくのだな、感じた作品でした。自分が教えたキウウリの馬がお出迎えてくれるなんて、ばあちゃんも感無量でしょうね。

湯をはった浴槽は舟、言い
過ぎた言葉をひろいあつめ
る旅の

(たろりすむ)

一言で言えば「湯船」ですが、それを二句目まで使って表すことで詩情が生まれています。温かい舟に揺られながら、一日のことを思い返して、じっくり反省をする時間。忙しい日々の中ときどき立ち止まる時間の大切さを情緒豊かに表現した美しい作品です。

るるぶとの答え合わせをす
るように作業めきつつ終え
た参拝

(三田村諒子)

初めて行く土地の情報を事前に知っておくために買う旅行雑誌「るるぶ」。「二礼二拍一礼」などの参拝の作法が紹介されていたのでしようね。情報を先に知ってしまっただけに、その通りにしなければ、という気持ちが先行して心から拝めず、参拝自体が作業っぽくなってしまふ、という気付きにハッとさせられた作品でした。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマや募集要項などの詳細は「うたらば」公式サイトをチェック↓



心を運ぶ仕事と思う

手紙には小花あかるきシール貼られて

人が人を想う
その尊さが
私の手のひらに
積みもりつづける



編集後記

今号も最後までお読みいただきありがとうございました！テーマ「仕事」はみなさんの仕事との向き合い方が作品から如実に感じられ、とても興味深かったです。生きるために働くのか、働いて生きるのか。永遠のテーマかも知れませんね。

今回のモデルは元 SKE48 で女優の加藤智子さん。お忙しいなか時間を作ってくださりありがとうございました！

夏頃から私の本業が急に忙しくなったこともあり新刊の発行が遅くなってしまい申し訳ありません。次号もなるべく早く制作に取り掛かった上で、投稿受付も再開してこれまでのペースに戻っていただけたらと思っていますので今後とも本誌をなにとぞよろしくお願いたします～！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ


うたらば vol.35 【仕事】 2023年12月4日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ ✉@tnkmsr_photo

○モデル / 加藤智子 ✉@moco620428 📧@info.katotomoko

○短歌 / 投稿者の皆様

✉@utalover 🌐 <https://www.utalover.com/>



短歌は
もっと
自由になれる